日本福祉大学福祉社会開発研究所『日本福祉大学研究紀要－現代と文化』
第 149 号　2024 年 9 月

〈座談会〉

ストーリーは世界を滅ぼすのか

―― 研究領域を超えて考える ――

齋　藤　一　晴
川　村　潤　子
中　野　　　諭
原　田　忠　直
片　山　善　博

『ストーリーが世界を滅ぼす』を起点として

原田：今日は，『ストーリーが世界を滅ぼす』（ジョナサン・ゴットサル著　月谷真紀訳　東洋経済新報社，2022 年）という本を一つの足掛かりとして，私たちがそれぞれ背負っている，あるいは影響を受けているストーリーについて考えてみようというのが主旨です．まず，始めに『ストーリーは世界を滅ぼす』の主旨を説明しておきましょう．片山先生，簡単にまとめていただけますか？

片山：この本は，思想家の内田樹さんの言にあるように「ポスト真実の時代の指南書」です．ストーリーが世界を滅ぼす．さまざまに語られる物語が，あたかも真実のように蔓延し，多くの人々を支配する．しかも私たちが長い時間をかけて作り上げてきた世界というものを壊している．この世界には公的な議論や研究を踏まえて見出された知見も含まれる．確かな根拠を持つものとして通用してきた言説が，一つの物語に格下げされて，ただただ面白い物語に取って代わられる．面白い物語は感染力が強いのだと，著者のジョナサン・ゴットサルは，次のように指摘しています．「トルストイは芸術（物語芸術を含む）を感情の感染症と定義している．優れた芸術は受け手を芸術家の感情と思想に感染させる．その芸術が優れているほど感染力は強い．優れた芸術ほど，私たちが持っている免疫を巧みに潜り抜けてウイルスを植え付ける．トルストイは科学ではなく芸術家の直観でこの結論に達したが，彼の死後 100 年以上経つ今，心理学者が研究室で同じ発見をしつつある」（同書，111 頁）．物語が面白かったり，よく出来たものであれば，そこに差別や戦争，抑圧や弾圧を正当化する内容が含まれていたとしても，無批判に受け入れてしまう．ゴットサルは，この本で，多くの事例を挙げながら，物語が人々を操作する仕組みやその

リスクについて述べています．例えば「陰謀論」，本書では「陰謀物語」とされますが，ここで語られる物語が事実に基づく判断を鈍らせ，私たちを扇動するというわけです．あるいは，アメリカでは「地球平面説」を 600 万人が信じているという例など，「え，本当に？」と思わざるを得ない事例が数多く挙げられています．この本では一貫して物語の危険性について述べられますが，同時に物語を語らざるを得ない必然性も指摘されています．人間は物語を物語る存在なんですね．物語や物語るということの仕組みを，心理学的知見を交えながら，物語に操作されないための方策を示したものが，簡単になりますが，本書の内容ということになると思います．どうしても物語を語らざるを得ない．その意味で私たちは，それぞれ何らかの物語性を持っていることになりますね．

原田：ありがとうございます．私は，この本を読んで，かなり直観的ですが，二つのことが頭に浮かびました．一つは，世代が異なる人と物語について語りたいという思いです．そして，もう一つは，著者のジョナサン・ゴットサルが心理学者であるということです．片山先生がいわれるように心理学的知見が散りばめられているのですが，個人的には，物語と心理学が上手く結びつきません．もちろん，世論であるとか，大衆心理を理解できなくはないのですが，本書の内容は，心理学の領域を超えているのではないかと思えてなりません．

中野：そうですね．ジョナサン・ゴットサルは，物語そのものの本質というよりも物語が伝播するメカニズムを心理学のアプローチで説明しているということではないでしょうか．この本で紹介されていないものも含まれますが，例えば自分の経験や信じる常識で容易に物事を捉えてしまうヒューリスティック，多数派に属したくなるハーディング効果，身内びいきになる内集団バイアス，立場が上の人に感じてしまう権威，先に定着したイメージや言語情報に強い影響を受けるプライミングといった心理学の諸概念は，物語の伝播を考える上では役立ちそうです．ただそれだけでは，物語のもつ性質，なぜ人々は物語に熱狂するのかの一部を説明しているだけに過ぎません．

原田：なるほど．伝播するメカニズムと物語のもつ性質ですね．個人的には伝播するメカニズムよりも性質が気になりますね．私たちが，背負っているというか，影響を受けている物語の性質について，本日は，みなさんとの会話のなかから整理できればと思います．

物語と歴史学

原田：では，話を物語の性質とは何か？という点に絞りながら進めていきましょう．ところで，先ほど片山先生がいわれたそれぞれが持つ物語性の意味は，直接，私たちの違いを表す言葉です．もちろん，日本社会という同じ空間で生きていることに違いはありません．しかし，1993

年生まれの川村先生，1975 年生まれの齋藤先生，中野先生，そして 1963 年生まれの片山先生と私ですが，年齢が異なれば，社会の出来事，例えば，オイルショック，ロッキード事件，バブル，オウム事件，阪神淡路大地震などを体験したのか，歴史として知っているのか，もっと身近に引き寄せて言えば，読んできた本，観てきた映画やテレビ，好きな音楽など違っていて当然だと思いますし，そうした時代性は，私たちに否応なしに異なるストーリーを背負わせているのではないかと予想しています．ただし，経験した出来事や趣味の違いを話すことが目的ではありません．私たち研究者が背負っている物語について話を進めていきたいと思います．とくに，あくまで個人的な興味でもあるのですが，物語と聞くと，歴史学との関係を聞きたくなります．歴史学者である齋藤先生から自分の背負っている物語と研究について始めていただきたいのですが，よろしいでしょうか．

齋藤：私の専門は歴史学ですが，研究領域からいうと物語をどう位置づけるかや物語論という分野があって，歴史をどういった立場から見るかや語ることができるかなどが関わるとされています．かつては一次史料にもとづいた実証が基本でした．そのため，史料ではなかなか裏付けられないもの，例えば，歴史の偶然性や人々の心情や生き方，語り，記録に残りにくい民衆の声など，いわば物語を論じることは簡単ではありませんでした．そもそも，無数の民衆の声は，ほとんど紙媒体に残っていません．1980 年代以降は両者の関係性を問うことが続けられてきました．

原田：検証できないものはダメということですね．最近，個人的には，歴史学と物語が上手く整理できないでいます．齋藤先生ご自身の研究スタイルっていうのは，どっちへ入るのですか？もちろん，歴史学者であることは重々承知で聞いているわけですし，二者一択ではない問題ですけど，齋藤先生が研究を始めた頃，今，言われたような「歴史学はどうあるべきか」というようなものが，あったのですか？あるいは，予め準備されているようなストーリーはあったのですか？

齋藤：私が大学院に入ったころ，2000 年ですが，指導教員から受けた研究指導は，史料の読み方や史料批判や実証の方法，裏付け方という歴史学では一般的なものだったと思います．歴史の流れや因果関係，歴史の法則や必然性といったものを意識する場面もありました．一方で，史料がどのような立場に立脚して書かれているのか，なぜその立場から史料を残したか，その残し方など，明確に史料に書かれていないことも念頭に置いて研究を深めるように教わりました．歴史学では，自分史，個人史，生き方など，ライフストーリーに着目する研究が進展をみせていました．そこには，史料には現れないものや読み取れないもの，偶然性や人と人との関わり合いといったものをどう分析するかが問われていたように思います．

原田：歴史学は史料に基づくものであり，一次史料を探し求めることが一つのストーリーであるという点．このストーリーから抜け出すことは難しいのでしょうけど，一次史料ではなかなか読

み解くことができない歴史に潜むストーリーというか，人びとが描くストーリーも気になるということでしょうが，少なくともここには二つのストーリーが存在していますね．

齋藤：はい．例えば，日中戦争の頃の華北で日本語教育がどのように行われていたのかを研究テーマにした場合，日本軍や文部省がどのような作戦や命令，指示を出していたのか一次史料を使って調べます．さらに，学校でどのような授業が行われ，教科書が使われていたのかなども確認する必要があります．

先日，北京の档案館に調査に行ったのですが，日本語学校に入学する際の願書が残っていることがわかりました．氏名や年齢，出生地，学歴，日本語以外にどのような学問分野に興味があるかなども記されていました．さらに，それらには白黒やカラーの顔写真が貼られていて，まさに人間が写し出されていました．

日本語学校だけでなく，中学校や高校でも日本語教育はなされていました．そこには，中国人だけでなく日本人の生徒もいます．両者の間にどのような関係性が生じていたのかを明らかにすることは容易ではありません．しかし，侵略する側とされる側との間，戦場ではないもののまさに最前線が学校，教室には存在していました．よって，そうした子どもたちの「交流」のなかに，日中戦争が持つ特殊性があったと考えています．

当時，子どもたちが描いた日記や学級日誌，後日語った証言や回顧録，学校史などが重要になってくると思います．名もなき，無名の物語．そこまで歴史学は入っていかなければならないと感じています．そうしないと，社会や生活，日常は描けないと考えています．

原田：その視点は，非常に面白いですね．もちろん，史料を探すのは骨の折れることでしょうが，人びとの声を拾うことによって歴史の再構築をはかるということですね．回顧録や証言と一次史料とは，どう違うのですか．一次史料とは，一体何なんですか．

齋藤：一次史料は，当時，その当事者にしか書けないことが書かれていると思います．例えば，個人であれば日記，日本軍であれば作戦命令書や戦闘詳報といった公的な記録です．回顧録や証言は，後日，思い出して，自身の経験を振り返って書いたものや語ったものになります．いずれも，記憶違いや事実誤認などが起こりえます．それをどう裏付けていくかが歴史学の役割になると思います．

例えば，日本軍「慰安婦」とされた女性は，日本軍の管理下に置かれ，兵士とともに戦場を移動することも珍しくありませんでした．そうすると，彼女たちは，今，自分がどこにいて，何月何日なのかさえ分からない状況になることもあります．この場合，記憶をたどり当時の様子を克明に描き出すことは困難です．記憶のなかにわずかに残る地名や風景などを手掛かりに，どのようなルートを，いつどのように移動したのか，一次史料と突き合わせることで女性たちの姿や当時の状況を復元していくことになります．

原田：そもそも思い出したくない記憶もあるでしょうしね．なかなか，回顧録や証言の裏をとるのは難しいと思いますが，実際，どうやって裏をとるのかという疑問も浮かびます．一次史料だけじゃなくて，当時の日記とか回顧録，聞き取り調査から得られた証言など，それらを含めたものが，齋藤先生が描こうとしている歴史と理解していいのでしょうか．そうであるならば，新しい歴史，あるいは物語を書いて，歴史を変えているということですね．例えば，先ほどの話に出てきた日本語教育なら，ある教科書が人びとに渡され，それを使って日本語を勉強したという事実は歴史そのものですね．しかし，それだけでは，日本語が普及したのかどうかは分からない．教科書を渡された人びとがどのように受け止めていたのか？そこが分からないと日本語学習に対するモチベーションを理解できないでしょう．もっといえば，人びとが生きているストーリーのなかで日本語を学ぶ意味を理解しないと，日本語の普及率であるとか，そのレベルがどうであったかは捉えることはできない．教科書を作って配布して，日本語の普及に努めた事実は歴史に刻まれるけど，試みたけど上手くいかなかったことを一次史料のなかで発見することは重要だけど，そこに留まってしまえば，それを歴史と呼ぶことはできないと思います．もちろん，教科書を渡された人びとのなかには，日本支配に対する対抗心みたいなものがあったことも事実でしょうが，この点ばかりに着目しても，それはそれで当時の人びとが描くストーリーを理解したとは言えないわけですよね．以前，齋藤先生から教わったことですが，当時，日本語教育で成果を上げていたのは，実はミッション系のスクールだったという事実は，全く異なるストーリーの存在を明らかにしますね．

齋藤：はい．とても皮肉というか，リアルな歴史像が見えてきます．ミッション系のスクールも日本語教育を行うことが日本から求められます．実際に，日本語を教えています．当時，日本語教育を中国社会，とりわけ学校に浸透させていく過程で課題となったのが，日本語教員の確保です．学校が多すぎるうえに日本語を教えられる教員が圧倒的に少ない．たとえ教えることができても，日本語のレベルが低くて日本側が求めるような主体的に学び，日本の戦争を支持するような中国人を養成することは実質的にできませんでした．

原田：2 つのストーリーが交わったところから，何か新しい歴史が生まれてくるようですね．ではなぜ，優秀な教員はミッション系のスクールを選択したのですか？

齋藤：日本語のレベルが高い教員が就職先に選ぶのは，ミッション系のスクールでした．そこには理由があります．まず，給料が高いことです．また，日中戦争が欧米からどう見られているのかを常に意識していた日本側にとって，ミッション系のスクールは，最も手が出しづらい場所でもありました．さらに，海外の情報を入手しやすかったと思いますし，戦禍から逃れるために中国から海外へ脱出するチャンスがあったかもしれません．そこには一般的な日中戦争下の日常生活とは異なるものがあったと考えられます．こういった事例は，「面白い」ですよね．

原田：海外への脱出ですか．そこには，明らかに当時の人びとの主体的な生き方がみえます．つまり，人びとの内面まで迫ると，異なるストーリーが浮かび上がりますね．さらにいえば，対立関係だけでは捉えきれない歴史が立ち上がってきます．

齋藤：そういうことです．

原田：対立関係という考え方は，社会を理解する上で，長く私たちを縛っていると思います．いわゆる唯物史観というか，マルクス的な社会の捉え方ですね．ただ，経済学の分野では，現実社会で社会主義国家が崩壊していく中で，マルクス経済学は勢いを失います．少なくとも私や片山先生が研究を始めた頃は，ちょうどその端境期だったと思いますが，中野先生の頃は，すでに死語になりつつあったのではないですか？

マルクスの残滓？

中野：そうですね．マルクス経済学を専門とする先生はもちろん学部に残っていましたが，限られた人でした．私が研究者を目指した 2000 年頭ぐらいでは，よくテレビに出ている先生もいらっしゃいましたが，マルクス経済学にかつての勢いはなかったと思います．学生に教育する学問として出番がないと言うと言い過ぎですが，関連する科目は充実していませんでした．我々が教育を受けた時代は，すでに新古典派あるいはケインジアンといった近代経済学が中心だったと思います．

原田：ですよね．私は完全に新古典派やケインジアンの波に乗り遅れたという感じです．しかし，マルクス経済学をしっかりと学んでいるわけでもない．かなり中途半端な存在だと自覚していますが，それ以上に近代経済学的なアプローチをどう理解していいのか分からないでもいます．

中野：特にマクロ経済学についてですが，近代経済学のなかで新古典派のように供給側を重視するのか，ケインジアンのように需要側を重視するのかは，どちらが正しいということではなく，説明される経済の状況によってケースバイケースだったと思います．もちろんどちらの立場をとるのか決めている先生方が多いと思いますが，私の場合は観察される対象に合わせるという考え方でした．例えば，先ほど中国の話が出ていましたが，私が初めて携わった研究テーマの１つが，1990 年代後半から 2000 年代にかけての中国の経済発展と環境問題でした．このころの中国はまさに世界の工場と呼ばれるように，すごい勢いで経済が伸びている時でしたので，需要側の動きが成長のオリジンになっているような側面がありました．そのため，ケインジアンのアプローチでうまく説明できたのだと思います．日本の経済についても，高度成長期であれば同様に

考えることもできると思いますが，成熟し低成長の時代になると，供給側から捉えた方がうまく説明できたり，あるいはニューケインジアンのモデルで説明されたりするようになりました．つまり，経済の状況の変化に基づいて，拠って立つものの見方，理論というのも変わってきていると思います．研究者は「私は何とか派」だと立場を明確にする方が多いのではないかと思いますが，私の場合はそういうこだわりがなく，このテーマを扱うならこの理論に基づいてこういう見方ができるよねというようなアプローチで研究をしてきました．名乗れるような拠って立つものがないという意味で，節操がないのですが.

原田：節操がないというわけではないと思います．私のような中途半端な存在よりもいいですよ．たぶん，私や片山先生の世代には，頭のどこかにマルクスが残っています．ただ，現在，大学の中でマルクス経済学者と近代経済学者が，二つに分かれるような状況というか，論争というか，ストーリーが衝突するようなことはないですね.

中野：そうですね.

原田：片山先生は，そもそも経済学部の出身でしたよね．先生の大学ではどうでしたか？

片山：自分がいた学部には近代経済学の先生は 1 人しかいなかったです．あとはほとんどマルクス経済学でした．ただ，1989 年のベルリンの壁が崩壊すると，一斉に崩れましたね．そこから，マルクス経済学の先生たちが退任しても，後任は取らないから，どんどんいなくなっていきました.

原田：退任するまえに転向していく研究者も多かったですね．私の指導教授は，転向はしなかったけど，ただ，『資本論』やレーニンの『帝国主義論』を読めとは言わなかったし，教えてもくれませんでした．一人で『資本論』を読んでもなかなか理解できない．読み続けるんだけど，苦しかったです.

片山：そうですね．読みにくい文章ですね.

原田：ただ，経済学の領域ではマルクスは消えていったけど，それ以外の分野では，マルクスに関する議論は 1980 年代以降も続きますよね.

片山：1980 年代は，マル経（マルクス経済学）が弱体化していた時期でした 1970 年代までは唯物史観や科学的唯物論がまだ勢力を保っていて，物質主義的なものの見方が強かったのですが，1980 年代はそれに対する反省の時期だったのかもしれません．物質的なものといっても実は文

化的なものがそこに深く関わっていて，1970 年代終わりごろには，文化的なもの・政治的なものと，物質的なもの・経済的なものの相互作用が考察の対象とされるようになっていました．マルクス研究も，構造主義やポスト構造主義などと関わりを持つようになっていましたね．またアルチュセールに見られるように 1960 年代以降広まる西洋マルクス主義の議論も，経済一辺倒ではなく，権力性や文化性などを組み入れたものでした．文化的なものへの着目は，1980 年代には，山口昌男らの文化人類学や博物学，あるいはサブカル的なものも含めて，生産主義よりも，交換や消費を重視するさまざまな知見を生み出しましたね．

原田：アルチュセールによる新たなイデオロギー論，人間の主体化とイデオロギーとの関係性ということでしょうか．人間はイデオロギーから逃れることができないということなんでしょうか．構造主義にしても，今日のテーマの物語にしても，なんだかよく似た側面があるような気がしますが，いかがですか？

片山：構造主義については，あまりはっきりしたことが言えないのですが，アルチュセールは，変革の主体を資本主義的な構造から切り離して考えることはできない，つまり主体の成り立ちの条件をその社会を成立させている構造に見出したのだと思います．イデオロギーも同じように，そうした構造から理解されます．では，物語を物語るのは誰か．構造になるわけです．物語を語る主体も，構造から独立しているわけではなく，構造から説明されるのです．1980 年代に入ると，ポスト構造主義として，社会構築主義的な見方がフェミニズムやフーコーの権力論などを通して私たちの世代には受け入れられていたような気がします．

原田：なるほど．構造主義，ポスト構造主義，権力論という議論が，必ずしもそのような議論に影響を受けているかどうかは別ですが，少なくとも経済学の領域においてイデオロギーは死語のように扱われているのではないかと思います．明らかに経済学の領域とは違った動きですね．中野先生の世代はもう吹っ切れた時代だと思いますが，いかがですか？

中野：我々の世代は，そういう社会主義国家の崩壊の後，あるいは日本でバブルがはじけた後なので，景気が悪くなったいわゆる就職氷河期の世代です．この時代は，経済学のなかで拠って立つものの変化というだけではなく，なにか思想というものが後退してしまったのかもしれません．つまり，もっと純粋に観察して分析するという方向にシフトしてしまったのではないかという気がします．

原田：観察という手法は，中野先生とはその出発点は大きく異なりますけど，自分の経験に引き寄せていえば，マルクス経済学の理論を純粋に研究する道が失われたなかで，残された方法だったのではないかと思います．いわゆる事例研究というか，フィールド研究です．私の場合は，上

海市の郊外の農村だとか，そこに住み着いた農民工を観察することを通して，事例研究を進めました．ただ，近代経済学を学んだわけではなかったので，ヒアリングやアンケートをとって，その実態を明らかにするという手法です．社会学に近づいたわけです．分析方法は，中野先生とは，大きく違いますが…．しかし，こういう観察という手法に対して，何か物足りなさみたいのを感じませんか？

中野：やはり純粋な科学，例えば，社会科学だけでは，必ずしも明らかにしたいことを明らかにはできないと思います．行間にあることを埋めるような思想とか哲学とかそういうものがないと，今やってることは結局何なのか説明しきれないという感じでしょうか．

原田：それどこで気づきました？このことに気づいた年齢というのは，重要だと思います．もちろん，気づかない人，気づいても無視しちゃう人は少なくないと思います．中野先生の場合は，何かきっかけがあったのですか？

中野：なんでしょうか．数打てば当たるという言い方は良くないかもしれませんが，多くの研究のケースをこなしていって，その経験を踏まえてというところがあるのかもしれません．この理論に基づいて仮説を立てました．観察してデータを集めて分析しました．そして，仮説はどうこうっていうのは議論できるのですが，一定のインプリケーションが得られればそれで本当に終わりなのかなと．もちろん，研究の課題は残されるので続いては行くのですが，遠い先が見えないというか．顕微鏡を覗いて大発見することに意味はありますが，それだけではわからないものがあるというか．

原田：確かに分からないことは沢山あります．ただ，私の場合は，観察した現象をマルクス的な視点から整理することが当たり前だと思っていた時期がありました．簡単にいえば，中国の農民とか，農民工は経済成長の陰で虐げられている存在だから，なんとかしなければならないって，本気で考えていました．でも，それって，今日の話から言うと，誰かが作ったストーリーに影響を受けて，彼らを見ているだけだなと気づきました．そうなると，やっぱり対象者の視点に立って，新しい物語を作りたいっていう願望みたいなのが，生まれてきてしまいます．もちろん，経済学には，思想とか哲学もなくても，数字で表すという美しさがあると思いますけど．しかし，その美しさの背後に潜む何かを考え始めると，止まらなくなると思います．ところで，齋藤先生，歴史学の歴史というのは，変な言い方ですが，歴史学におけるストーリーの変遷をまとめるとどんな感じなんですか？

齋藤：世代や時代の影響は大きいですよね．歴史学の場合，研究史的に考えると1980年代から自己改革を迫られたと思います．革命史観，唯物史観，弁証法，発達段階論といったものを問い

直す動きが起こります．文革の終焉，冷戦の終結，東欧の社会主義諸国の崩壊など，これまでのあたりまえだったことが崩れていった時期だと思います．個人の経験や意識とともに言語，語り，ストーリーそのものが問われ始めました．言語論的展開とも言いました．私自身は 1975 年生まれですから，研究の世界に入る前に起こっていたことで，研究・教育を志すようになって最も影響を受けた研究潮流だと考えています．

先ほど話した華北における日本語教育も，意識的に日本語を学ぶ機会をつくった，もしくは作らざるを得なかった中国人とともに，日本や日本人，日本語を話す中国人との関係性のなかで意識せずに日本語を使って「交流」する機会もあったと思います．つまり，支配，被支配という関係性は，単純な二項対立ではなくて，人びとの関わり合い，一人ひとりのストーリーがぶつかり合う瞬間が複雑に存在したということです．そうした当時の様子を再現するためには，歴史の因果関係とともに偶然性にも着目しなければならない．人と人の出会いや縁というものは，歴史を分析するうえで大切なものだと感じています．

西洋の歴史観

原田：なかなか面白い指摘ですね．因果関係からの必然，それに沿ったストーリーが展開され，因果関係を新たに考え，ストーリーに修正を加えていく．しかし，偶然性を掘り下げると，既存のストーリーを否定したり，破壊するような何かが生まれて，固着した思想を取り除いていくことができるかもしれない．しかし，偶然と言いながら，きっと必然を求めてしまうかもしれない．話がループしてしまいますが，このあたりに論破しなきゃいけない何かがあると思います．ここを突破しないと学問領域の面白いところまでいけないのではないかな．でも，こうしたジレンマみたいなものは，歴史的にみて，何度も繰り返されているのでしょうか？

片山：西洋の歴史観ってその時代時代によって大きく変化するんですね．例えば，中世だといわゆる聖書をもとにしたキリスト教的な歴史観になるし，18 世紀から 19 世紀になると今に続く歴史観の原型のようなものが作られていくんですけど，例えば 18 世紀のフランスの啓蒙思想では，野蛮から文明といったような進歩史観が登場して，その見方で，歴史をとらえていくことになります．また 19 世紀の後半にはダーウィンの進化論が登場しましたし，またマルクスの唯物史観では，原始共産制から奴隷制，封建制，資本制，そして共産制へと移行していく歴史観が示されます．私の専門は，18 世紀から 19 世紀にかけてのドイツの思想なのですが，その時代にも，大きく二つの歴史観が登場しています．一つが，古代ギリシアに西洋の源流を見ていく歴史観です．古典派的歴史観といっていいかもしれません．古代ギリシアを起点として，それまでの東洋的歴史とそれ以後のゲルマン的歴史になるわけですが，古代ギリシアである意味完成した共同体が一旦壊れた後，ゲルマン人が新たに構成し直すといったイメージになります．もう一つが中世ヨーロッパ共同体（教区，教団）に源流を見出す歴史観です．これは，特にフランス革命後のナ

ショナリズムの台頭と深く結びついて，ゲルマン人による中世共同体をモデルとした新たな共同体を構成するといった歴史観です．ロマン派的歴史観といっていいでしょう．歴史観自体が固有の歴史的背景を持っていると同時に，現代にも続く，問題と言ってもいいかと思います．もう少し言うと，例えば，ゲーテは 1816 年に「ハイデルベルク」というエッセイを書いています．この背景には，北方ルネサンスの絵画をどう評価するかという問題があるのですが，まずフランス革命によって，教会や貴族の財政難で，絵画などの美術品が大量に放出されます．それらを安く買い取って商売する画商が登場するのですが，蒐集された美術品を地域ごと，あるいは時代ごとに整理することを始めるのです．さらにナポレオンがヨーロッパ中の絵画を収奪したことで，それぞれの地域で美術品を通した文化のアイデンティティが求められることになります．当時のロマン派の論人たちは，集めた絵画（特に中世のキリスト教絵画）を通して，そこにゲルマン人のアイデンティティを求めます．これに対して，ゲーテは，中世キリスト教絵画の源流をギリシア・ローマの美術に見出し，それがビザンティン美術によって細々とではあれ，維持され，15 世紀に北方ルネサンスという形で開花したと捉えるわけです．

原田：今の話を聞いて，山田五郎が「大人の教養講座」のなかで，確かルネサンスの解説をしていた時だったと思いますが，「古代ローマ文化」「キリスト教」「ゲルマン民族」の 3 つのキーワードで西洋の歴史を説明していたのを思い出しました．快楽的な「古代ローマ文化」と禁欲的な「キリスト教」という互いに相まみえないというか，矛盾するものを，ゲルマン民族が，なんとか辻褄を合わせながら，西洋文化は成立しているという話です．もちろん，細部にこだわれば，単純すぎるのかもしれませんが，古代ローマに根を持つ価値観とキリスト教的な価値観，それを上手く融合・調整する必要に迫られたということでしょうが，融合と調整という視点から絵画の歴史を紐解くことができるというのが，山田五郎の見解です．これと同じように物語も造られていったと理解することができると思います．しかし，それはある意味，捏造でもあるわけですよね．もっとも，そうした新しい物語の必要性は，一つは，ゲルマン民族がヨーロッパを支配する上で不可欠だったのでしょうが，それだけではないと思います．

片山：自分たちの起源というのか，どうしてもそういうものを持ってしまうのですね．起源を持つことで，歴史という物語は成立するのだと思います．ここでは近代に登場した歴史観の話をしましたが，同じようなことは現代でも起こるのだと思います．

原田：自分たちの起源探しということですか．確かにルネサンスという言葉は，起源探しと言い換えることもできますね．古代ローマの文化に戻りながら，別の物語を作るということは，既存の歴史観を相対化することもできるのではないかな．こうした作業は，時代に躍動性を与えることになるんでしょうね．ただ，もう少し離れてみると，西洋で造られたストーリーに依存していることも事実です．つまり，私たちが信じているストーリーというのは，結局ヨーロッパ的なも

のであるという見方もできます．なんだか，沢山のストーリーが身体にまとわりついている気分になります．

片山：ちょっと源氏物語に触れたいと思います．源氏物語の研究って膨大にあるのですが，近代に始まったのではなくて，平安末期から始まっているのです．源氏物語は，平安末期にはもう普通に読むことができなくなっていて，さまざまな注釈を必要としたようです．出てくる言葉がすでに使われていない．あるいは，和歌がたくさん出てきますが，本歌取りというのか，そのネタになっていたものを調べるという研究もされているわけです．これらをまとめた集大成が，江戸時代に出版された本居宣長の『湖月抄』なのですが，それまでの成果を含めたかなり充実したものです．しかし，明治になって，東大を中心とする大学の研究者たちがドイツの文献学研究を積極的に取り入れます．文献学は，元々は古代ギリシアの文献や聖書解釈のための研究であったわけですが，ドイツに留学した学者たちがこうした方法を取り入れて，源氏研究を進めたわけです．ここで一つの断絶が生まれるわけで，西欧の方法を用いた研究ですね．これにも二つあって，今述べたような文献学的研究と同時に，当時（19世紀）のロマン派に通ずる美学を用いた研究もあります．いずれにしても西欧の尺度で源氏を研究するわけです．その際に，やはり西欧の公序良俗の価値観（倫理観）が入ってきて，その規範で源氏物語を評価することになります．そうすると，風紀の乱れが目立つわけです．そこで，仏教の因果応報とかの説明を入れたり，あるいはそうしたものを全く度外視して，単なる文献学に終始するというよくわからなくなる状況になるわけです．

原田：断然からの捻じ曲げという感じですね．

片山：やはり，明治になって，西洋的価値観で，物語を作り直す．江戸と明治は何か断絶している．明治になって新しい社会が生まれて，それが太平洋戦争まで続いて崩壊し，戦後，やはり西洋の価値観で作り直される．これが1980年代まで続いたのではないかと思います．でも明治に活躍した人々は，江戸時代の生まれであって，その時代の価値観の中で育った人たちです．夏目漱石の『吾輩は猫である』なんかも，江戸的価値観が相当反映されていると言われています．でも，明治から新しい日本が始まって，という物語の方がワクワクするし受け入れられやすいのかもしれません．1980年くらいには，このような物語の司馬史観が流行りましたね．そして1990年代に入ると，グローバリズムの反動というのか，補足というのか，それを補強するというのか，自国中心的で排他的な歴史修正主義が出てきました．歴史のある部分を切り取って，都合よく繋ぎ合わせて，物語を作る．そしてそれがいかにも正しい歴史認識だと思わせる．とても危険なことだと思います．

原田：切り取った物語で，歴史にしても現在の社会にしても語りやすいっていうことですね．し

かし，逆に言うと，この切り取った社会の方がわかりやすいっていうことは受け入れやすいんだと思います．実際，私も 1980 年代に司馬史観にどっぷり浸かっていました．だから，歴史の偉い先生が，坂本龍馬は過大評価され過ぎという批判に触れると，頭では理解できるのですが，どこか受け入れたくない部分も残っています．若い時に感じたワクワク感が否定された気分になります．もちろん，加齢とともに反発心は減退しているのも事実ですけど….ただ，最近，歴史を扱った，とくに日本の古代史に関する YouTube をみていると，妄想としか思えないものが少なくないですね．たとえば，日本人はシュメール人の末裔だとか，逆に，日本人が大陸に渡って文明を広めたとか，いずれにせよ，日本人は偉大な民族であるという歴史観みたいな内容です．実際，誇張されたコンテンツにワクワクしてしまう人も少なくないでしょう．もちろん，ユダヤ人渡来説を扱ったコンテンツは，真面目に検証を試みていると思いますし，好奇心を揉られているのも事実です．中野先生は，ユダヤ人渡来説は詳しいですよね？

中野：日本人の祖先が古代イスラエルの部族の 1 つであるとする，つまり日本人とユダヤ人は共通の祖先をもつという日ユ同祖論は 150 年くらい前から語られています．日本人とユダヤ人の宗教，言語，文化上の類似点が数多く確認されています．例えば，ユダヤ教の超正統派の男性はもみあげを伸ばし，黒いハットと衣装を身に着けていますが，その姿とそっくりな埴輪が千葉県の芝山古墳から出土しています．また，ユダヤ人はテフィリンと呼ばれる聖句を収めた黒い箱を頭につけて礼拝するのですが，これは日本の修験道で山伏が頭につける頭襟に似ています（山伏はほら貝を吹きますが，ユダヤ人は角笛を吹きます）．ややオカルト的な要素が入っていますが，青森県の戸来村にはキリストの墓があり，また徳島県の剣山にはソロモンの秘宝が眠るとされ，駐日イスラエル大使も訪れています．日本人とユダヤ人の祖先が共通か否かという事実は 1 つであるはずですが，それを歴史学や人類学のアプローチからはっきり立証できずに論争になります．論争が盛り上がるところでは，わからないことを何とか理解したいという人々の欲求を満たすべく数多くの物語が湧き出てきます．そこには，学術的な関心だけではなく，政治的な思惑も混入します．気づけば，もはやそれが事実であるかどうかは問題ではなくなっています．古代史の謎にまつわる物語には，抗しがたい誘惑がありますね．

原田：抗しがたい誘惑とは上手いこと言いますね．私もユダヤの話しは，それほど詳しくはありませんけど，ついつい食いついてしまいます．もちろん，根底には真実を知りたいという欲望もありますけど，それ以上に，目の前に古代という未知な領域が現れると，あまりにも古い話すぎて事実は分かりそうにないと思いながら，逆に分からないからこそ，想像が湧き上がってきて，ワクワクします．こうしたワクワクした感情の隙間を縫うようにして，政治的な思惑とかがかぶさってくるのかもしれないですね．

小さな物語

齋藤：そうですね．現代社会では切り取られた物語の方が受け止めやすい，分かりやすい，というのはあると思います．歴史学では，その分かりやすさが歴史修正主義と親和性があるというか，通底する部分があるのではないかと批判的に考える場合もあると思います．そこで物語をすべて拒絶して史料に立ち戻るということではなくて，歴史学の現状としては，多様かつ無数の物語を提示することで，そういう切り取り方もあるけど，別な切り取り方，物語が存在していて，全体から見ることで切り取り方そのものを問えるようになると感じています．

小さな物語の発掘．それが歴史学の役割，原点だと思います．個人史でも自分史でもいい，語ること，言語化することでしか表せないことがあります．歴史学を研究する者は，そうした点に視野を広げつつ，自分自身の歴史認識や歴史観をたえず自己点検，自己更新していかなければならないと考えています．

原田：簡単な方に流されやすいっていうのもあるし，流されないと認めてもらえないっていうことでしょうね．

齋藤：はい．流された方が心地よいというか．それが一般的な社会における理解なんだと言うような人もいます．また，歴史修正主義的な発言をすることで初めて自分を認められたと感じる人もいます．いろいろな考え方があるなかで，歴史教育でリテラシーというか，批判的に物事をとらえられるようになるトレーニングは必要だと考えています．

原田：お互いに理解し合える環境がないと流されてしまいます．今の世の中，相手のことを認めるってことはほとんどないですし，自分が必要とされてるって思う瞬間ってのはほぼ皆無かもしれません．

齋藤：たしかにそうだと思います．私は授業で学生に親兄弟以外の人から必要とされたことはありますかと聞くことがあります．多くの学生は，そうした経験が無いと反応しますし，なかなか言語化できません．そもそも一人ひとりに物語があるんだという前提が，もう共有されていないように感じています．私は私．あなたはあなた．そこの関わり合いに何が生じるかに興味がないというか．

原田：ますます寂しい話だね．

齋藤：そもそも相手のことを認めても現代社会を生きるうえで何もプラスは無いと多くの人は考

えているのかもしれません．むしろマイナスの方がいいと．誰も物語を認めてくれないというか．

中野：自分の信じたいものを信じているだけだから，その物語を心地良く感じる人だけが受け容れているのではないでしょうか．

齋藤：たしかにそうですね．

川村：先生たちの話を聞いていて，1970 年代は，見ていたテレビドラマ，聞いていた音楽とか，共通というか，共感できるものがあったと思います．私の時代でいえば，月 9 のドラマは多くの人が見ていました．いま，流行っていた音楽を一緒に聞けば，懐かしいねと，その音楽を聞いていた時代にあったことを話題にすることができます．ただ，最近というか，2000 年代生まれの人たちをみていると，共通の話題とかがないし，共感できる話が少ない気がします．聴いている音楽は，同じ世代でも共通していないのではないかと思いますし，YouTube や Tiktok を見ていても，それぞれフォローしているチャンネルは違います．もちろん，ストーリーもかなり多様化していて，例えば，高校でクラスに 40 人いたとしても，同じ空間にいて，机を並べていても，共感すべき素材がない．ただ横にいる人みたいな感じではないでしょうか．

原田：なるほど．子供の頃の覚えてるコマーシャルとか，ヒット曲とか，時代のキャッチコピーとか．共通項は沢山あります．例えば，「24 時間戦えますか？」というコマーシャルは誰もが知っています．今でもコマーシャルに出ていた時任三郎は，戦い続けているのかなと思うときがありますし，そう感じている同世代の人は多いでしょうね．しかし，今は共有すべきものが何もないということなのかもしれないですね．

中野：川村さんより下の世代は，むしろ物語が溢れすぎて世代内で共有できないということかもしれませんね．

原田：多様化し過ぎているということかな？

中野：多様化という言い方は，必ずしも正確ではないかもしれません．ただ，1 つ 1 つの物語のサイクルが早くなっているだけかも．

原田：なるほど．同じようなストーリーが多いだけで，しかも，それが次から次に与えられ続けているということですね．興味のあるものが，次から次に目の前を移動していって，やたら早く変わっていくから，同世代が同時にそれを見る確率は非常に低いということですね．選択肢がた

くさん広がってるわけではないということですね．もう少し川村さんの話を聞きましょう．とはいえ，これまでの話しは，同じ社会に生きていても，全然わかんないでしょう？

川村：正直，わかりません．なんだか自分のバックグランドがなくて，空っぽのような気分になります．

原田：空っぽじゃないよ．

川村：話しは違うかもしれないんですけど，大学院生時代に，仲間で読書会やったり，研究会をやったりしていたというお話をいろんな先生たちから聞きます．とくに，古典と呼ばれるような書物をみんなで読んで語り合ったとか･･･．そういう機会を作れていないのが現状です．さらにそもそもゆとり世代と言われ続けていますから．中身がスカスカの教科書で勉強して，楽でいいねとか，基礎がないねとか･･･．それに友だちや，家族，また親の会社の人たちと社員旅行にいったとか，様々なことを幅広い世代で共有していたものがあったのかなという風に，話を聞いていてよく思います．そういう話を聞くと，自分より上の世代との交流というものもあまりなかったですし，身近な大人であった教師たちも，何か刺激を与えてくれるような存在ではなかったかなと．それこそ「昔は先生たちもひどかった」というような話も耳にしますが，そんな我が道を歩いているというような，自分の世界観をみせてくれるような教師や大人がいたという記憶はないですね．なので，何かを共有しているといっても，せいぜい同級生や家族というような狭い世界でしかなかったかと思います．多感な時期に何も刺激も受けずにきたのか，空っぽな気がしてしまいますね．

原田：そこまで自虐的に捉えなくてもいいと思いますが，それでも，若手の研究者をみてると，かわいそうだと思うことはしばしばありますね．例えば，いろんな学会誌なんかに投稿しても，結構却下されています．却下の理由を見せてもらうことがあるけど，その理由がバラバラというか，査読者の視点がぶれてますね．よくあるのが，一人は A 評価だけど，もう一人は D 評価．査読者の見解があまりにも違い過ぎて，修正不可能だと思います．それぞれの立脚点がよくわからないんです．それでも査読者の意図を考えると，それぞれの背後に潜むストーリーの違いがあるのではないかと思うことがあります．それに沿ったストーリーじゃないとなかなか通らないのが現状でしょうね．

中野：それは多分，学会誌の編集者が良くないですね．編集者がその 2 つのレビューを読んで，どちらを立てるかっていうのを調整しなければならないし，それが仕事であるはずです．

原田：それが正解ですけど，なんだか，出来上がっている査読者のストーリーの牙城を切り崩す

のは大変な気がします．ストーリーがバラバラになっているともいえるけど，ストーリーなき世界というか，ストーリーがたくさんありすぎるっていうか，そういう中で何か研究そのものが停滞しているのではないかと思うことがあります．

片山：私より一世代前の研究者だと，例えば，ヘーゲルの著書の，どこに何が書いてあるのかを全部覚えている人がいるんです．全集や著作集の何ページのどこに何が書いてあるかわかるんですね．相当な思い入れを持って読んでいて，そこに見出されたものは実証的だと確信しているわけです．つまり自らの読みがあたかも客観的な事実であるかのように思っているわけです．確かに自分が一番読んだという確信を持っているわけですから，ある意味当然のことかもしれません．しかしやはりそこにはその人の読み込みが入っているわけです．何らかの物語があると思うのですが．そして，このことは他の自分と異なる解釈を排除することになります．自分と似たような解釈については，評価し，反する解釈は評価しないということになるんです．皆がそうだというわけではないんですが．でもそうなってしまうと，本書でも取り上げられているプラトンの「洞窟の比喩」ではありませんが，洞窟の中にいる人が，蝋燭があるものを壁に写した影を，本物だと思っていることとあまり変わりがないことになってしまいます．その一方で，じゃあ洞窟から出れば，本当のものがわかるかといったらそうとも言い切れない気がします．プラトンは洞窟から出るため国家からストーリーを語る詩人を追い出すように求めたわけです．詩人の語る物語は感覚に訴えるものですから，そうした物語を一掃するわけです．そして物語を否定するところに本当の世界が成り立つというわけです．では，物語のない世界とはどのような世界なのか．例えば，本当に本当の存在をプラトンは，イデアというわけですが，イデアの影としてのこの世界，この世界の出来事を語るイデアの影の影である物語，こうした物語を追放してある意味概念化された世界を構築するわけですが，このように世界を語ること自体，物語性を完全に離れていると言えるのか，これ自体も一つの物語ではないか，こうした疑念も浮かんできます．ただ，プラトンの洞窟の比喩は，物語とは何かを問う，いわゆるメタ物語を問題にしているともいえます．物語を相対化する視点を示しているともいえます．そもそも，プラトンの著作は，ほとんどが対話篇で，文学的表現を用いて語っていて，これらは文学的にも優れたものとの評価を受けています．

原田：物語から逃げることはできない，というのは分かります．物語を語り，それを伝えていくことが人間の宿命でもあると思います．しかし，それはまさに文学という領域で充分なのか，それだけでは足りないのかということが私の一つの問題意識です．実証を証明するために，物語が必要なのか？と問うことです．もっとも，社会科学も物語から逃れることはできないというのが現実です．例えば，歴史学の実証ってのをどう考えるかっていうところが気になりますね．とくに，歴史学は，表からみた歴史も裏から見ると違ってくる．別の物語があるということになる．

齋藤：先ほど話した日本語教育にも同じことがいえると思います．強要されて日本語を学んだのか．日本や日本人との関係上，「主体的」に日本語を学んだのか（学ばざるをえなかったのか）．また，それは，学ぶことと同時に，日本からの直接的な攻撃を受けることを避けるための行為でもあり，いわば抵抗ともいえる．そこには，したたかさや反骨心もあったでしょうし，うまく立ち振る舞わなければならないという強制性も働いていたと考えます．つまり，支配と被支配という単純な構図ではなく，人と人との関わり合いのなかに無数の物語が生まれていて，そこに当時を生きた人びとの生があり，同時代史が存在するといえるでしょう．

いつの，どの場面，どのような物語を切り取るかでそこから見えてくる歴史は様々です．いろいろな歴史を語ることができると思いますが，中国人に様々な葛藤をもたらした理由を考えると，やはり日本の戦争の性格がどのようなものであったかは自ずと分かるように思います．

歴史学では，だいたい10年くらいごとにまとまった通史が企画，刊行されてきたと思います．しかし，近年はそうした通史を刊行することが難しくなっています．それは，歴史学の研究領域が細分化されていること．なかには「蛸壷化」してしまっている研究があることも事実です．歴史のダイナミズムを語る，ということは難しくなっています．しかし，無数の小さな物語にこそ歴史のダイナミズムが宿っていると考えます．そこから全体史，通史へと膨らませていくかが問われているのだと思います．

例えば，近年の歴史教科書を例にとると，富岡製紙工場で働く女工たちの描かれかたにも変化があります．かつて女工といえば近代化する日本において経済的なしわ寄せが最も現れた存在として記述されていました．ところが，そうした女工に家族を養っているという自負や日本の近代化を支えているんだというプライドがあった，つまり，時代が生んだ悲劇の象徴ではなく，過酷な環境かつ自分一人では変えられない厳しい時代を生き抜いたサバイバーとして書かれているものもあります．「悲劇の象徴」も「サバイバー」も，女工に当てはまるのかもしれませんが，女工一人ひとりが残した物語，言葉をどれだけ収集，分析したものなのか問わなければなりません．歴史の一部分，個人史の一部分を切り取って語るのではなく，時代背景を加味しつつ，女工が何を語ることができたのか，もしくはできなかったのか，その両方を知る必要があるように思います．

アフリカの奴隷貿易の話しもありましたが，日本の戦争や植民地支配に関わっては，植民地下の朝鮮や台湾が近代化したのか，しなかったのか，という論点が長く議論されてきました．この問いに答えるためには，その時代を生きた人々の主体性について語る必要があると考えています．

原田：その異なる視点から捉えなおすことが重要だと思います．

齋藤：歴史教育では，こうした誰の立場から歴史を読み解くか，ということが従来より扱う必要がでてきたと考えます．生徒が出した答えを，正解，不正解と扱うのではなく，子どもたちがな

ぜその立場や視点から歴史に向き合うのか，ということを問い，考えを述べてもらう必要があります．生徒の考えは，往々にして変化しますし，教員や友人の意見から影響を受けます．自分だけの確固とした歴史認識を形成することは簡単ではありませんし，歴史認識を深めるためのトレーニング，意見の異なる他者との対話の方が重要です．この点を，理解しておく必要があるように思います．

他者の物語に子どもたちが接近する一つの方法が，共感です．かわいそうとか正義感とか，そういった感情にもとづいて共感することもありますが，子どもたちの共感の基本は，歴史を生きた人物に自分自身を重ね合わせたときに生じるリアルさ，何らかの選択に迫られるという揺さぶりだと考えています．そうした経験を歴史の授業のなかで用意できるかどうか，教員は問われていますし，教員養成課程にも求められていると思います．

子どもの歴史認識や歴史観を揺さぶり続けること．これは大切だと感じています．

原田：多分それに耐えることができない人間の方が多いというふうには感じるけどね．訓練なのかもしれないけど．

齋藤：そうですね，生徒からしたら訳がわからないというか，まさに「耐える」ことを強いることにつながるかもしれません．

面白い調査結果があります．『僕らの太平洋戦争』（鳩の森書房，1973）を記した本多公栄が行った戦争学習について，村井淳志という研究者が後年分析したものです．それは，日本の戦争の悲惨さ，加害性を教訓的に扱った授業を受けた子どもたちの歴史認識を追跡したもので，進級や進学を経て社会に出るころには日本の戦争を肯定的にとらえる割合が高まっているというものです．教員が日本の戦争を侵略戦争だと位置づければ位置づけるほど，日本は悪くない，おじいちゃんはそんなことをするはずがない，といういわば物語を生み出してきたように思います．歴史教育の役割，教員の教え方は，とても大事になってくると感じています．

川村：教員の教え方という点では，先にも少し話させてもらっていたように，よく先生方，「それって持論でしょ」って思うような偏った教師がいたとかいいますよね．それが良いか悪いかというのは置いておいても，すごく羨ましいなと思います．そういう偏った教師の授業って，多分記憶に何らかの形で残ると思うんですよね．私は大学に入ってから，教科書には書かれることがないだろうと話す大学教員の講義を受けて，これまで聞いたことがないような歴史を知ったり，様々な捉え方がされていることの背景を知りたくなったりしました．ですが，それまでは，教科書を読めばわかるし，そう書いてありますよね，っというような感じで，特徴のある授業をする人には出会ってきませんでした．今は大学を除いてですが，私が教育を受けてきたときよりもさらに，教科書会社がつくった資料やテストなどを積極的に用いているところも多くなってきていることもあってか，教え方にこだわれているのかなあと疑問に思うことがあります．もちろん，

こだわっている人もたくさんいると思いますが，特徴のある授業を受けたことがない人が，どうやって物語を語るのかなと思ってしまいます.

原田：なるほど．先生が，語る力さえ失ってしまっているということかもしれないですね．さらにいえば，揺さぶる方法も考える必要がありますね.

齋藤：そうですね．なんでも揺さぶればいいってものでもないですね．かつて戦争学習で，日本兵の刺突訓練を実際に生徒に追体験させて兵士の心情や戦争を考えさせる実践がありました．上官から命じられたから人を殺しても仕方がない，戦争とはそのようなものだと自分に言い聞かせるか，それとも，それでもいいのかと自分自身に問いかけられるか，というものです．この実践には賛否両論ありました．小学生や中学生には難しいという意見や，戦争学習というよりも倫理観を問う実践ではないか，という批判です．いずれにしても，一人の人間の「生」，物語を追体験する経験が歴史教育では必要だということには私も賛成です.

原田：追体験とは，共感するということなんだと思います．物語を共有することでもあります．しかし，問題は，その物語は誰が，どのような目的で作ったのかということが問われます.

齋藤：それこそ先生がおっしゃったように，そんな判断をさせるのは歴史教育ではなくて教員のエゴだっていう意見はもちろんあります.

原田：共感というのは，大事なことですけど，危険も潜んでいる．何か面白い話を大きな声で語った人が勝ってしまうような.

齋藤：ファシズム研究は歴史学にとって重要な意味を持ってきました．なぜ国民の多くがファシズムに共感，絡め取られていったのか，という研究テーマです．近年の研究では，日常のなかにある娯楽，例えば夏休みに子どもたちはラジオ体操をして参加した証としてスタンプをおしてもらったり，お菓子をもらったりする．そうした経験を通じて，子どもたちは実際に心身を鍛え，他の子どもたちと一体感を味わい，自然と戦争の時代のなかで画一化されていく．そのプロセスは，本人からしたら楽しいもの，意識，無意識を問わず生活の当たり前の一部分だったと思います．こうした上からのつくられた共感は，窮屈さをはらみつつも，楽しいものだったと推察します．これがファシズムの正体です．ファシズムが辛いものであれば，みんながそれに関わるようになっていったとは考えられません．ドイツも戦争中に温泉に行くといったツーリズムが盛んになります．ファシズムが体制という形で，ダイレクトに人々に伝わる，入っていく，そういう社会，メディアのあり方だったと思います．そこには共感もあったと考えます.

原田：ファシズムは，それを経験した人びとにとって辛いものではなく，楽しいものだったという発見は面白いですね．もちろん，ファシズムの正体はその通りなんでしょうが，逆から読めばどういうことになるのかな？つまり，楽しい体験ができる時間と空間を人びと，もう少し具体的に言えば，学生に何か課題を与えて，それをみんなで解決させるような空間と時間を与えたとしたら，どうなる？少なくとも学生たちは楽しいでしょうし，そこに共感が生まれても不思議ではない．

片山：経験のことを，プラグマティズムの哲学者であるデューイは，有機体と環境との相互作用であると言っています．有機体はある環境に置かれると，環境との間に何らかの軋轢を生み出すように，ある人が，いきなり馴染みのない環境に置かれると，さまざまな困難に巻き込まれるというわけです．でもそのときその人は，生きていくために，その困難がなんであるのかを一つひとつ明らかにし，葛藤しながらもなんとか乗り越えていこうとするわけです．共感も解決のための一つの方策かもしれません．よく言われる問題解決型というのは，有機体が自ら置かれた状況の中に問題を発見し，探究し，解決していくという物語です．だからこれは誰かに与えられるものではなく，有機体が矛盾に巻き込まれながらも自ら解決していくプロセスということになります．デューイはここに生命としての生き生きとした論理があると言っています．また，解決と言っても，誤謬主義と言って，問題に対する正しい解決はないというか，常に誤りを含んだ暫定的な解決があるだけだとも言います．パターン化された物語を否定する物語というか，他の物語でもあり得た物語というか，問題解決型の物語と言ってもそうした複雑な面を持っているわけです．

原田：困難であるとか，葛藤であるとか，矛盾に巻き込まれるという状況が，出発点であるとし，そうした状況に一人で直面するのか，あるいは複数で経験するのか，という違いはあるのでしょうが，いずれにせよ，そのような状況を与えることはできない．だから，軽いというか，簡単な物語を提供して，そこに潜む問題を発見して，解決してというしかない．ファシズムのように楽しい物語を提供する方法もあるでしょう．しかし，矛盾に直面しない限り，目の前に現れる物語の本質を見抜くことは難しいでしょう．とはいえ，随分と落としどころが難しい話に進んでしまったというか，多分答えが出ないテーマを喋ってるのかもしれない．ちょっと経済学の話に戻りましょう．

中野：もう釈迦に説法ですが，経済学は物事を大胆にシンプルにして，事象の間の関係性を捉えるもので，以前はその考え方でいろんなことが説明できていたのだと思います．ところが，どんどん現代に近づくにつれて物事が複雑になり，あるいはもっと物事を複雑に捉えようとするようになり，この理論さえ当てはめれば説明できるよねということが少なくなってきているように感じます．例えば，事象の間の因果関係を捉えるなかで，もっと確率や期待のようなものを取り込

もうとする試みは何十年も前から行われてきましたが，リーマンショックのような現象の予測には失敗してしまった．だから，どれだけ精緻な経済モデルを作ったとしても，経済の事象を捉えきれない．そのようなジレンマを抱えつつも，この経済の事象のこの部分はこのモデルで説明しましょうということを繰り返しながら，経済学は生きながらえているのではないかという気がします．

そのように考えると，経済学者それぞれが研究成果に基づいて勝手に物を語るので，何が正しいかの判断は難しいですね．仮にそこに偽物のストーリーが混ざっていたとしても，同じ経済学者がメタ分析をしても見抜けないかもしれない．ましてや専門知識のない一般の人々にとっては判断がつかないので，それこそ共感できたものが受け入れられていくのではないでしょうか．例えば，自分の今の生活が苦しい理由はこれなんだというのがストンと入ってくるストーリーだけを受け取って，それが正しいかどうかは判断できないでしょう．ですから，お互いに語り合うなどストーリーをチェックする機能がどこかにないと，人々の分断や格差が広がってしまうかもしれません．

原田：だからこそ，ついつい違う物語を語りたくなる．

中野：いやだからこそ，あんまりすぐに語る必要はないと思うんですよ．

原田：なるほど．いいこと言いますね．高校生の時に，「ツァラトゥストラのように山を降りてべらべらしゃべるな」と注意されたことがあります．つまり，山のなかで考え続けろということです．要するにベラベラ喋るなと．自分の最後に何か語るべきときはあると思うんですけど，実は，それが何時なのかは分からない．たぶん，話そうと思ったときは，遅いかもしれない．ただ，言えることは，蓄積しておくしかない．物語を何か作っていかなきゃいけないと思う．いかがですかね．片山先生….

片山：別に日本だけじゃなくて海外もそうで，例えばヘーゲル研究で言うと，マルクスやフォイエルバッハからの手垢のついた評価を抜きにして，純粋にヘーゲルを理解するという流れが，特に1980年代に起きたと思うんですね．するとどうなるかというと，ヘーゲルが直接書いたもの，あるいは講義録をもとにした研究となるんです．これまで出版されたヘーゲル全集は，基本的に弟子たちがまとめたもので，かなりの手が入っている．場合によっては捏造したと言えるものもある．こうしたものをすべて取り去って，ありのままのヘーゲルを取り出すという試みになるのです．1980年ごろから発行されているドイツのヘーゲル全集もこうしたものです．ただし，こうした研究には限界があって，そもそも本来のヘーゲルのものを取り出すことができないわけです．もちろんメモやノートはありますが，あくまでメモなので限界があります．講義録については，聴講生によって，記述が違っていたりします．実証的に研究を進めてきたわけですが，ドイ

ツはもとより日本においてもこの実証的研究は躓いてしまいました．しかし，こうした研究にも意義があって，いわゆる体系家としてのヘーゲル像というイメージを壊すことはできたわけです．すべてを体系的に語ったわけではなく，体系的に語ろうとしたという理解に変化しました．そのことによってさまざまな解釈の余地が生まれました．大きな物語がなくなり，小さな物語がたくさん生まれることにもなったわけです．

原田：そうした小さな物語が生まれたことは，ヘーゲル研究に限ったことではないと思います．ただ，小さな物語に核心的な論点，つまり，唯物史観そのものが隠れてしまっている気がします．

片山：唯物史観って，やはり大きな物語で，かなり効力はあったし，今でも全然ないかといったら，あると思うんですね．例えば，経済史という授業を持たせていただいているのですが，封建制や資本制の成り立ちについては，もちろんすべてとは言いませんが，唯物史観を用いて，初めて理解できることもあると思っています．ただ問題はそれですべてが語れると思ってしまうことですね．一つの切り口なんだけれども，同時に重要な切り口だと思います．

ところで，1980 年代くらいまでは歴史とは何かを原理的に問う歴史哲学的な語り方があったと思うのですが，1980 年代半ばを境にぱったりなくなったように思います．その一方で，さまざまな歴史観が，なになに史観としてストーリー化されているような気がします．歴史とは何かを問うことなく，歴史についての物語がたくさん生まれていく．こうした時代が，この 30 年くらい続いています．私の専門であるヘーゲルのものに「歴史哲学講義」があります．これは，歴史とは自由が実現されていくプロセスであるという視点から世界史（といっても西欧を中心とした）を語ったものです．これは大きな物語の一つなのですが，戦乱や国家の没落等を経るなかで，人間が，自らの自由や人権を一般に自覚するようになってきたことは確かなことかと思います．ちなみに，ヘーゲルは「歴史哲学講義」という本を書いているわけではなく，息子や弟子がヘーゲルや聴講生のノートをまとめたものです．ヘーゲルは 1831 年に亡くなっていますが，ちょうどフランスの 7 月革命やドイツの 3 月革命が失敗して，国家の反動の時期に重なります．そうした時代状況を反映して，弟子たちによる「歴史哲学講義」は編集されたと言われています．ただ，どちらにしても，ヘーゲルの描こうとした歴史の捉え方は，重要なものではないかと思っているのです．

原田：自由が実現されるプロセスは継続していく必要があるのではないかと思います．あるいは，歴史や物語は，自由が実現されていくプロセスというような根本的な問い掛けが必要なのでしょう．たぶん，大切な部分が抜け落ちてしまった物語が氾濫していることが問題なのかもしれません．簡単に物語を作るとか，べらべら話す必要はないけど，また，その核心に自由の実現がいつも置かれる必要はないけど，自由と同等の学問的な価値を中心に据えて，物語を築いていく

ことが大事でしょう．川村さん，どうですか？

川村：言いたいことは分かるのですが，どうしても物語を語ることを求められている気がしませんね．これまで，何度もそれはあなたがみている世界だけなのではないかと，言われている気がしますし，くじけそうになります．私はみなさんと違ってこういう風に捉えました，というような，ふりかけをかけるぐらいの小さな物語を語れるかどうかぐらいのような気がしています．でも，「みんなが見てきた世界，わからないんですけど」といようなことは決して言えません．農民工の研究をしているときによく思いました．そんな明るい農民工はいないから見方がおかしいと言われ続けてきましたね．

原田：違う物語を描くということは，骨太な核心を築くことが必要だということでしょう．今日の話をまとめるという意味も込めて，最後に一言づつお願いします．

齋藤：今日は貴重な機会をありがとうございました．先生方と話しをして，小さな物語をたくさんあつめることに当面は注力していきたいと改めて感じました．日本占領下の華北における日本語教育の実相を明らかにするためには，先ほど話した日本語学校に入学するために記された願書の奥に，彼らや彼女たちの物語があったことを記録していく必要があると考えています．それらはあくまでも切り取られたもの，時代や社会の一断面に過ぎません．そのため全体像を語ることは簡単ではないと感じています．しかし，たしかにその時代を生きた，もっと言えば同時代史を形作った人々がいたことを明らかにしない限り，日本の戦争の本質，当時の社会の姿は復元できないと考えています．

　中国で資料を収集することは簡単ではありません．戦争は敏感なテーマですし，個人史はプライベートに関わることで，あれもこれもと集められるわけではありません．しかし，かつて資料がどこにあるかさえ分からなかった時代とは異なり，いまはだいぶ資料がデジタル化され公開されています．そうした資料のなかには，まだ手つかずのものがたくさんあります．特に北京や上海といった大都市の档案館ではなく，地方都市のものはこれから解明されるものの方が多いように感じています．

原田：ヘーゲル研究が，細部に分散化してしまった点とは，真逆の状況にあると言えますね．歴史学であるから当然だし，それが先生の研究スタイルということになりますね．ただ，問題は，そうした小さな物語を拾い集めた時，何が見えてくるかということでしょうが，その核心的なテーマとは一体どのようなものなのでしょうか？社会の復元の先に何を描こうとしているのか？このあたりは，今後の課題ともいえますね．

川村：本日はありがとうございました．今日の自分の発言を振り返ると，時代とか環境のせいに

してしまっているなと思い，恥ずかしくなりました．そして，先生方がどのようなことを考えて研究に向き合われているのかを知ることができて，とても励まされる時にもなりました．最近，論文をかいたり，研究することに臆病になっているというか，自分の頭のなかの物語を外に出すことに抵抗を感じていましたが，みなさんも悩まれていることを知ることができました．ですので，中野先生がおっしゃられていたように，物語をチェックする機能じゃないですけど，このような語り合える場所があるとないとでは物語の語られ方が大きく変わってくるのだろうなとも思いました．

私は現在日本で生活している中華料理人たちを調査していますが，彼らがどのように語られているかもですが，彼らが語ろうとしているストーリーとは何かということにも目を向けていきたいと思います．

もう少し時間があれば，先生方が大学院生時代や，30 代，40 代，50 代など，それぞれの年代のときに描いていたストーリーとはどのようなもので，それは今日お話いていただいたストーリーとどのような違いがあるのか，ということもうかがいたかったなと思っています．また何かの機会で，詳しくお話うかがえたらなと思います．

片山：座談会を通して世代によっても，物語の捉え方が違うということがわかりました．その一方で，物語について考えることはとても重要なことだと確信しました．私たちは，ストーリーを離れて（離れたいと思っても）語ることはできません．であれば，ストーリーの中にいながら，その外にいるという二つの視点を持つ他ないように思います．ストーリーを語りながら語っていることに自覚的である．そしてストーリーは，共同性を生み出すものでもあるということです．物語は，それだけで成り立っているのではなく，私たちがそれを読むこと，もっと積極的に言えばそこに参加することで初めて成立するということです．そのためには物語は，常に他者に開かれていなければなりません．開かれることによって，物語は多様で豊かなものになるのだと思います．開かれた物語には真実がある，閉じた物語には真実はない，と言えるのではないでしょうか．そのためには，物語とは何かを問う視点，つまり物語の構造について自覚的であることが必要なことだと思います．

中野：人々の属性やおかれる環境によって受容されるストーリーは異なる訳ですが，それらはいつまでも平行で交わりえない，つまり共有できないものなのでしょうか．ストーリーの多様性を認め合うと言えば聞こえはよいですが，放っておけば極端な思想に基づくストーリーが人々を分断してしまうこともあるでしょう．それを避けるためには，他者の受容するストーリーを拒絶するのではなく，丁寧に分解し，自らのストーリーと共通のパーツを探す努力が必要だと思います．平行であると思い込んでいたストーリー同士が，たった１点だけでも接しているかもしれません．完全に共有できないとしても，共有点が１つでもあれば，融和の解がそこにあると思います．